



ベートーヴェン小噺 2 — Anniversary 編 —

1835年、ボンにベートーヴェン像を建立するプロジェクトが発足した。来る生誕75年(1845年)を記念したもので、フランツ・リストが資金集めの立役者となる。シューマンも寄付目的で幻想曲 ハ長調 Op.17を寄せ(1838年、リストに献呈)、のちにメケッティ社によるチャリティー楽譜「ベートーヴェン・アルバム」(1842年出版)にも掲載された。

幻想曲の第1楽章コーダ、ベートーヴェンの連作歌曲集「遙かなる恋人へ An die ferne Geliebte」終曲の旋律がしみじみと現れる。シューマンにとっての「遙かなる恋人 die ferne Geliebte」は、当時ウィークの妨害で会えなくなっていた恋人クララその人だった。この場面は、ベートーヴェンへのオマージュであると同時に、愛するクララへの二重のメッセージになっている。

シューマンは一途で素朴なこの連作歌曲集をこよなく愛した。白眉は終曲「さあ受け取ってくれ、かつて君に歌ったこの歌を」の終盤で、初めて出会った牧場を回想する第1曲の旋律が回帰するところ。ベートーヴェンは、駆り立てるようなピアノを懐かしの旋律にマリアージュさせ、届かない憧れを高らかに謳い上げ



る。連作歌曲ならではの“回想”の効果。シューマンは、“歌の年”1840年、自身の連作歌曲集「女の愛と生涯」「詩人の恋」の終曲で、ピアノ後奏による回想シーンをみごとに演出したが、この感動的な場面には、ベートーヴェンがかつて開拓した手法が確かに息づいている。

おすすめCD

Hermann Prey



「遙かなる恋人へ」には、ヘルマン・プライのあたたかいバリトンが不思議なほどびったり。語りすぎない純朴な歌どころが一途な恋と重なり合う。ピアノはレナード・ホカンソン。一方シューマンの熱っぽく夢みるような世界に肉薄しているのがカトリーヌ・コラルルのピアノ。音楽の体温は高いが、どことなく曖昧さや浮遊感を伴う危うさが絶妙で、幻想曲も好演。「女の愛と生涯」はエリー・アメリンク&ダルトン・ボールドウィン。「詩人の恋」には、シャルル・パンゼラ&アルフレッド・コルトーによるあまりにも幻想的な名演がある。



内藤 晃
ピアニスト、
指揮者、
作曲編曲家

月刊音楽現代にコラム「名曲の向こう側」を連載。楽譜やCDの解説多数。フランツ・リストのマスタークラスの記録を翻訳出版予定。音楽の奥深さや新しい楽しみ方をみなさんと共有したいと願っています。

Twitter@Akira0404